

# ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子図書館 編集：松居友

61号・2017年10月



激しい空爆もふくむ戦闘で家も崩壊して、マラウィ市からイリガン市へ逃げてきた戦争避難民の子どもたち。ミンダナオ子ども図書館では、第三回の支援活動をした。現地のイスラムの若者たちといっしょに、お米や食料、石鹸や衣服やランドセル赤ちゃんのいる家庭には、紙おむつも508袋配給した。そして、読み語りをして、歌って踊って落ちこんでいる子も親も元気になった。千ヨコレートのお粥をみんなで食べた。憎しみあい、殺しあって戦争に勝つことよりも友情と愛こそが生きる力。子どもこそが未来なのに子どもが、悲しくなるような社会を何で大人は作っていくの？日本でも、青少年の自殺や引きこもり貧困家庭が増えて行くばかり。それどころか、北朝鮮との戦争も起こりそう。ミサイルが飛んできて、原爆が落ちたらマラウィどころではなく、何百万人もの子どもたちが、死んでいく・・・

## ミンダナオの状況

松居友

マラウイで戦闘が起こり、40万を  
超す避難民が、隣のイリガン市に逃げ  
てきています。現地からの要請があり、  
ミンダナオ子ども図書館も、3度目の  
救済支援に向かいました。

MCLの本部のあるキダバワン市か  
ら13時間。皆様方から送られてきた、  
支援のための寄付で、米、食料やビニ  
ールシート、石鹸などの支援物資を買  
い、送られてきた古着やランドセルを、  
現地の人々に手渡しました。

また、他のNGOと違って、物資支  
援以外にも、読み語りや唄と踊りの、  
友情と愛の支援もあって、現地の子ど  
もたちや若者たち、そして親やお年寄  
りも大喜びでした。マラウイから避難  
してきて、自ら支援活動に関わってく  
れた、ファルハナさんたちのおかげで、



本当に良い支援を開始できたと思いま  
す。

現地は、都市がごとごとく空爆で崩  
壊されて、とりあえずイスラム国など  
の反政府勢力の力が押さえられ、報道  
に寄りますと、ほぼ収まりつつあるよ  
うです。しかし、避難生活をしている  
人々にとっては、次第に自分の町に帰  
ってからが大変。日本政府も、マラウ  
イ市の再建のための、支援をするよう  
です。

国際NGOや福祉局からの支援は、  
次第に無くなってきているようです  
が、過去の経験からも、マラウイ市ど  
して山岳地帯もふくめて、今年度から  
来年にかけて、MCLは、支援活動を  
現地の若者たちといっしょにしていく  
予定です。

今後、今回の戦闘で、親を失った子  
たちを、ミンダナオ子ども図書館の本  
部にひきとって、住みこみの奨学生と  
して、大学まで行かせてあげる予定で  
す。また、手術にいたるまでの、子ど  
もの医療の必要性も、出てくるでしょ  
う。よろしければ、医療のための自由  
寄付、そして時期が来ましたら、奨学  
生支援もよろしくお願いいたします。  
子どもが未来なのに、なんで大人た  
ちは、子どもたちを悲しませる、戦争  
なんかするの？

## ファルハナ

宮本 梓

9月最後の土曜日。MCLから車で  
1時間程のところにある、イリガン  
という町にいる。

7月の終わりにオープンしたばかり  
だという、ピカピカのショッピング  
モールのフロアを、ファルハナと歩い  
ている。恋人同士のように手をつない  
で、お互いに安心しきって。

ファルハナって、フィリピンのイス  
ラム教徒の女の子によくある名前。彼  
女はマラナオ族で、イリガンの大学4  
年生。5月の終わりに戦争が始まって  
からは、授業のない土日に、マラウイ



から避難してきた人々を手伝うボラン  
ティアをしている。

私たちは、今日の支援活動が終わっ  
て、MCLのスタッフと、イリガンの  
学生ボランティアたちと、夕食を食べ  
る場所を探している。土曜日の夕暮れ  
時のモールは、買い物袋を両手に抱え  
た家族連れや、浮かれたおしゃべりな若  
い人たちがいっぱいだ。

ここから車で40分のところで戦争  
をしているなんて、うそみたい。

約4か月前。ミンダナオ島のマラ  
ウイを、イスラム国に忠誠を誓うマウ  
テグループが占拠した。



講演会、報告会、家庭集會に、松居友が謝礼に関係なくうかがいます。

サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。

講演や家庭集會の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。

メールや電話でもお申し込みください。メール：[meltomo@yahoo.co.jp](mailto:meltomo@yahoo.co.jp)

電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）

10月になろうというのに戦闘は終  
わらず、たくさんの方が避難生活を  
続けている。7月よりMCLも、イリ  
ガンに避難してきた人々への緊急支  
援を開始した。

9月30日、10月1日のMCLの  
第3回目の支援は、避難所ではなく、  
「ホームベース」と呼ばれる、個々の  
家に避難している人々を対象にされ  
た。避難所の方が、行政や大きな支  
援団体からの援助が届いていて、ホ  
ームベースにいる人々は、物資の配  
給もあまり受け取っていないからだ。

今回の支援の内容は、絵本の読み  
語り、チョコレート味のお粥の炊き  
出し、救援物資の配布。救援物資は、



米3キロと古着と洗濯石鹸、石鹸の  
セットをくれた508袋と、赤ちゃん  
のいる家庭用に紙おむつ、子どもた  
ちへのランドセルと学用品だ。

お米や石鹸を買ったり、イリガンへ  
の旅費や滞在費は日本からの緊急支  
援の寄付で賄われた。古着やランド  
セル、学用品も、日本から送って下  
さったものだ。

ファルハナは、店内放送で流れて  
くる「もろびとごぞりて」を小さく  
口ずさみながら、もうすぐクリスマス  
だね、と楽しそうに話している。

9月に入ったらクリスマスだなんて  
フィリピンらしいなあ、と思いつつ  
そうだね、と、彼女と顔を見合わせ  
ると同時にふわりと笑う。

クリスマス、ファルハナは家族と  
過ごすのかな、と想像して、あれ、  
イスラム教徒はクリスマスを祝わ  
ないんだ、と、クリスマスまでに戦  
争が終わってほしい。

ミンダナオの戦争は、宗教の対立  
で起こっている、という話も聴く  
けれど、違和感を感じずにはいられ  
ない。私がここで出会うムスリムの  
人たちは、クリスマスなどけしから  
ん、なんて言わずにプレゼント交換に  
参加したり、キリスト教徒の人だ  
って、イスラム歴の

新年も仕事を休むし、学校も授  
業がない。

人々は、呼吸をするように自然  
にお互いの宗教や風習を受け入  
れて、尊重しているように見える。

ショッピングモールのフードコ  
ーには満員で、結局、町に戻って  
夕食を食べることになる。ムスリ  
ムのスタッフやボランティアが居  
るから、鶏肉専門のレストランを  
探す。

町に出ると、兵隊さんをたくさん  
乗せた軍用車が目に付く。私たち  
が入ったレストランでも、兵隊さ  
んのグループがご飯を食べてい  
る。独身のスタッフは、その中  
にかっこいい人がいないかしら、  
とキャーキャー言っている。



一緒に記念写真を撮る人たちも  
いて、ちよつと驚く。

日常の中に戦争が当たり前にな  
って、人々がそれに慣れてい  
るのが、気持ち悪い、と思う。検  
問や、兵士や銃のある風景が日  
常で、それを変えたいと思う自  
分は平和の中で育ったのだと改  
めて思う。そして、いちいち思  
わないと、自分も戦争のある日  
常に慣れてしまいたい、こわい。

席について食事が運ばれてくる  
のを待つ間、イリガンの学生ボ  
ランティアたちは、携帯電話の  
チェックに忙しい。MCLのスタ  
ッフたちともすっぴんになり、  
良くなって、一緒に自撮り写  
真を撮ったり、冗談を言い合  
って笑っている。

イリガンはMCLから遠く、スタ  
ッフも町や避難している人々の  
様子から分からない。彼女たち  
がいなかったら、私たちは、  
避難所を探すことも難しかった  
だろう。大活躍だった。孤立  
した避難民のいる場所を調べ、  
家族の様子を調べるときに、  
マラナオ語の通訳をしてくれた。

5〜6人の学生ボランティアが  
活動を手伝ってくれていた中で、  
私の目は、ファルハナを追っ  
ていた。

MCLは、救援物資を配る時に混



今、イリガンの避難所に入る自分を、被災者だった子ども頃の自分は、どう見つめるのだろうか。

2か所目のホームベースで、絵本の読み語りが終わって、女の子が一人、私のところへ駆け寄って来て、笑った。お姉さん、うたってくれて、ありがとう。

ありがとう、なんて言ってもらえなくて、よかった。受け入れてもらえただけで、うれしかった。日本からのたくさんの支援を届けられて、よかった。一度きりの支援で終わるのでなく、また、ここに帰って来られて、みんなに会えてよかった。



を避けるために、グリーンカードと呼ばれる行政が発行した避難民証明書を確認し、名前のリストを作りながら、チケットを配る。ファルハナは、200人を超える人たちの証明書を確認した後も、「疲れた」と言わない。さすがに笑顔は、うっすらとしか残っていないけれど、「疲れた？」と聴いても、「働けてうれしい」というようなことを言う。

私は、避難民支援に行くことが不安だった。自分が阪神大震災で被災したときに、被災地に入ってきたボランティアたちに強い拒絶の気持ちを持ってしまったからだ。土足で自分の家に入ってこられたように感じた。

楽しそうに、崩れたビルの写真を撮らないで。私たちのこと、「かわいそうな被災者」っていう目で見ないで。「かわいそうな被災者」を助けてあげて、「ありがとう」って言われて、壊れていない、あなたの町に戻れば「えらいね」って褒められて、いいわね。

たくさんの人が死んだのに、私と同じくらいの歳の子が、家族で全滅したりしているのに、「たくさん学べていい経験だったね」なんて、言わないで。

自分たちに助けが必要だったことは分かっているのに、たくさんの人たちが心配してくれてうれしかったのに、私は、悲しかった。

ショックだった。その時まで、ボランティアはいいことだと信じていた。自分も、大きくなったらアジアやアフリカの貧しくてかわいそうなお子さんを助けてあげるのだ、と。自分は常に助ける側で、助けられなければならない側に落ちることなど、考えたこともなかった。

2日目の午後、支援活動が全て終わって、ボランティアたちも家に帰ることになる。

ファルハナに、「またね」と言う。笑う。ぎゅっと抱きしめられるので別れがたくて、ほったたをくつつける。

今年中に、4回目の支援にイリガンに戻るだろうか。避難所やホームベースで顔見知りになった人たちを思い浮かべる。

ファルハナが乗ったジブニーが見えなくなるまで、見送る。明日は、朝の4時にイリガンを出て、MCLに戻る。MCLの子どもたちが、私たちを待っている。

**自由寄付は、一番根幹になる寄付です。**  
**貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。**  
**保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている**  
**200名ほどの奨学生の生活費。ガンリン代を含む活動全般の諸経費等々。**  
**機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。**  
**他の方々に紹介していただければ幸いです。**

## 戦争と死

松居友（写真も全て撮影）

ミンダナオに住む決断をしたのは、2000年から2003年の長期にわたり、北コタバト州とイスラム自治区で起こった戦争を、目前にした時だった。

この戦争は、ほとんど日本に報道されなかったが、120万人を超える極貧の避難民たちが、路上や空き地で、3年半ちかく避難生活をよぎなくされた。マラウイの避難民は、40万人。家財道具も家畜も、ときには衣服も



なんでこんなものが、ぼくたちの所にやって来るの???

残したまま、必死に逃げてくる避難民たちは、テントもビニールシートもなく、道のわきに木の枝を立てて、そのうえにヤシの葉をふいた下で生活をしてしまう。雨が降れば、びしょ濡れになってしまう。可愛そうなのは、子どもたちだ。

今回のマラウイとの違いは、マラウイは、都市が戦争の舞台で、激しい空爆が行われ、建物の崩壊がひどいこと。一方でぼくが見たピキットの戦争は、広大な貧困の湿原地帯が、反政府の拠点になっていったこと。当時の、イスラム反政府勢力は、MILF（モロ民族解放戦線）と呼ばれるイスラム最



また戦争が始まった。ぼくもう疲れた。

大の勢力だが、ドゥテルテ大統領の掲げる州立制によって、イスラム州の独立と和平交渉の進展を期待して、今回は政府側にたつて、中立の立場で和平を守っている。これには、日本のJICAのトップだった緒方貞子さんの提案で作られた、国際停戦監視団の中川さん方が果たした役割も大きい。

ミンダナオ子ども図書館も、協力してきており、イスラム自治区の最も危険で困難なカルボガン集落に、4棟目の学校も建てて、去年の12月に完成した。ただし、マラウイの戦闘によって発令された戒厳令のために、開所式は延期されたままだ。



たちまち、食べものも底をつく

2001年、「イスラムの人たちを、助けに行かなければ！」と言って、救済に誘ってくれたバリエス司教につれられて、現地を訪れ、表情を失った子どもたちの様子を見てショックを受け、活動を始めた経緯。

そしてなぜ故に、当時はまだ16、7歳の若者たちが、NGOミンダナオ子ども図書館を立ちあげたかは、拙著『手をつなごうよ』（彩流社）に書いたのですが、あれから、15年。大きな戦争は、3年おきに、小さな戦闘は、毎年のように勃発し、そのたびに救済支援を行ってきた。



屋根もなく、雨が降ったらどうしよう



戦争は、とりわけ年寄りと子どもに厳しい。

「現地の人だけではなく、国際停戦監視団やNGOでも、容易に入れないと言われていて、反政府地域に、武器も持たずに、良く入っていきませぬ、怖くないですか？」と、良く聞かれる。正直に言って、怖いと思うときもある。でも「そこに、子どもたちがいる。」と思うと、スウィットと恐怖が消えていき、心に愛情がわいてきて、「いかなくつちゃ。命をうしなっても！」と、思うから不思議だ。



この子たちも、病院に運んだ。

法があり、現地では2003年のテロリスト掃討作戦の時も、アメリカ軍の無人機による空爆もあったけれど、日本人は武器を持って他国に攻め入らないうという、平和憲法による約束があるので、過去の大战時の残酷な記憶はあるものの、現地の人々も信じてくれた。ほくも、現地で「平和の祈り」の集会を行うときには、必ず日本軍が過去行った、残虐行為を謝罪する。ピキットには、日本軍が駐屯した要塞城が残っているし、敗戦で湿原に逃げた日本兵たちは、現地でイスラム教徒となり、その子孫は日系人となって、今も自分の血筋を隠して生きている。山に



両親を失った子は、奨学生に採用してきた

逃れた新人民軍（共産ゲリラ）にも、日系人はけっこう多い。集団的自衛権の法案が通った後に、彼らが恐れたのは、日本軍（自衛隊）が海外に派兵できるようになったことだ。その後さらに、平和憲法が改変されて、米軍と一緒に、日本軍がミンダナオにも攻めてくる。そうすれば、日本軍が日本人の血の入った人々を、殺すことにもなるだろう。



米軍の爆撃を受けた地域の子たちには、奇形が多い。現地では、劣化ウランの影響ではないかと・・・。

そのころは、まだカトリックの洗礼を受けてもいずに、どちらかというと神の存在を認めない、実存主義者であったのだが、なぜか聖書にある、イエスの言葉が浮かんできた。「剣を取る者はみな、剣で滅びる。」この聖句での「滅びる」という言葉の意味は、「地獄に落ちていく」という意味だろう。それなのに、世界の多くのクリスチャンたちが、十字軍の時代から、宗教を前面にだして「正義」の名のもとに、武器をもって戦争に向かっていくのはなぜだろう。少なくともカトリック教会は、かつての十字軍の行いも含めて、宗教を前面に押し出して戦争を起こした過去の

講演会、報告会、家庭集會に、松居友が謝礼に関係なくかかっています。  
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。  
講演や家庭集會の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。  
メールや電話でもお申し込みください。メール：[mcitomo@yahoo.co.jp](mailto:mcitomo@yahoo.co.jp)  
電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）



ビニールシートを渡して、大喜びのお母さん



今回のマラウィで、皆さんから送られた支援物資を渡した



子どもたちが、幸せに生きられる世界を作ろう



友情と愛があるから、生きていける

行為が、過ちだったと認めて、神に罪の許しを請うているけれど・・・。  
ミンダナオの多くのイスラムの人々は、穏やかで平和を願う人々が多いのに、日本でも、イスラム教徒に対する誤解が多いので、次世代の子どもたちが、そのような偏見を抱いて育つことが悲しくて、絵本『サダムとせかいいち大きなワニ』（今人舎）を書いた。

ミンダナオ子ども図書館の子どもたちを見ていて驚くのは、先住民、イスラム、クリスチャンの子たちが、同じ屋根の下で、宗教の違いを認め合って、友情と愛のなかで、「わたしたちは、

宗教や部族が違っていて、兄弟姉妹で一つの家族だよ。」といて、共同生活していることだ。

今年の4、5月に、ミンダナオ子ども図書館の12人の先住民、イスラム、クリスチャンの若者たちが、立正佼成会の招きで、各々の踊りと唄を披露しに日本に行き、お寺や教会や学校や公会堂で公演をしたけれども、多くの人々が、宗教や部族が違うにもかかわらず、いっしょに歌って踊る姿に、驚きと感動を隠せない様子だった。

その反響のすごさを見て、これから毎年4、5月に日本公演をすることにした。日本の青少年や家族やお年寄り

にも、大事な企画だと思っている。（希望の方は、松居友にメール [mclhomo@gmail.com](mailto:mclhomo@gmail.com)）

現地の村長さんや、宗教指導者たちからも、「IS（イスラム国）や過激なグループは、あれは本当のイスラムじゃないよ。」と言う言葉が聞かれる。

仏教徒は、平和主義者かと思っただけで、いまミャンマーで起こっている事を見ると、結局は、国の利益や権力のためには、戦争も辞さないというのが、人間らしさ？

ぼくは仏教にも親しみをもっていて、ぼくの人生に最も大きな影響を与えてくださった、今の自分があるの

は、小学校時代の恩師で、曹洞宗の僧侶である、無着成恭先生との出会いがあったから。

「なぜ、軍に入りたいの？」と、現地の若者たちに聞くと、ほとんどの子どもたちが、「給料がいいから。」と、答える。日本の若者たちも同じ？

だんだんわかってきたのは、ミンダナオのイスラム地域の戦争が起こる（外からの力によって起こされる？）理由は、武器売却と広大に湿原地帯に眠る石油と天然ガスの利権を、国際資本とつながって、どこがとるかというきわめて生臭い話だった。

戦争で儲けたい人々が、背後で意図的に、宗教や部族対立をおおって戦争を作る？

山を動かすような強い信仰をもっていても、愛がなければ無に等しい。

## NPO法人「MCLジャパン」

代表理事 前田容子

こんにちは。NPO法人 MCL  
ジャパン代表理事 前田容子です。

支援者のみなさまの中には、MCL  
ジャパンって何？ミンダナオ子ども図  
書館との関係は？と、思っておられる  
方もいらっしゃると思います。

そこで今回、あらためてMCLジャ  
パンの活動についてご紹介させていた  
だきたいと思います。

MCLジャパンは、ミンダナオ子ど  
も図書館 (MCL) を日本サイドから  
サポートするという目的で、2011  
年11月に、特定非営利活動法人 (N  
PO) として設立されました。現在、  
理事3名、監事1名で構成しています。  
皆さま方からのご寄付は おもに郵  
貯銀行の振り替え口座に送金いただい  
ていますが、その口座を管理し、MCL  
への送金業務を行うのが 大きな仕  
事です。

そして 館長の松居友さん、現地代  
表のエープリルリンさんの講演会の企  
画、連絡、準備等のサポート、ご寄付  
に対する受領礼状、領収書の送付、お  
問い合わせなどへの対応、そして、M

CLジャパンのホームページ (日本窓  
口) や、フェイスブックの運営、現地  
日本人スタッフ宮木梓さんとの連絡調  
整、情報管理などを行っています。

活動年度は毎年9月から翌年8月ま  
です。昨年8月から私が代表理事に  
なりましたので、この一年間の活動と  
会計報告をさせていただきます。

昨年は全国814人の方から、総額  
34157,690円のご寄付をいただき  
ました。おかげさまで毎月200万か  
ら300万円を現地に送金することが  
出来ました。現地MCLでは、ご寄付  
額にもとづきながら、月々の運営計画  
をたてたものを、さらに理事会で検討  
し、州福祉局の承認をへて予算を執行  
しています。

MCLジャパンの活動としては、昨  
年は松居さん、エープリルリンさんの  
講演会、集会を、全国98箇所で行い  
ました。

また初めての試みとして MCLの  
高校生大学生スタッフ11名が来日  
し、全国の学校や集会などでミンダナ  
オ島の民族舞踏と歌を披露する公演を  
行いました。(これは、立正佼成会のお  
招きによるもので、佼成会で4支部  
で公演させていただきました)

その他にこれまで『日本窓口』として

発信していたホームページを一新し、  
Facebookをたちあげました。そし  
て「PAYPAL」のシステムを利用して、  
クレジット決済でご寄付いただける方  
法を開発いたしました。

これらの経費として、松居友さん、  
エープリルリンさん、宮木梓さんへ  
の給与、各人月6万円。MCLジャ  
パンの事務通信費、交通費138,193  
円。ミンダナオへの往復を含む交通  
費、講演関係交通費、事務通信費  
1,081,473円。公演関係交通費、事  
務費484,738円を、ご寄付の中から  
MCLジャパンの活動費として使わせ  
ていただきました。

2016年度より私がMCLジャパ  
ンをお預かりしていますが、それまで  
の5年間は北九州市の藤瀬憲一さんが  
代表をつとめてくださいました。また、  
長い間 写真入りの心のこもった礼状  
葉書を送ってくださいしたのは、行橋市  
の頭島義成さんです。

窓口サイトの立ち上げでは、斉藤典  
彦さん笠原千絵さん、Facebookの  
立ち上げとクレジットカード支援のシ  
ステムづくりは、小森豊さんにご尽力  
いただきました。MCL紹介のポス  
ターとパンフレットは中園敏也さんが

作ってくださいました。

これらのみなさんにお礼を申し上げ  
るとともに、MCLジャパンはこのよ  
うに有志で運営していますので、これ  
からも多くの皆さま方のお力添えをぜ  
ひお願いしたいと存じます。

MCLに送ったお金は、600人の  
子ども達の学費 生活費 医療費に、  
読み語り 保育所建設 植林 緊急  
支援その他その他の多くの活動費、運  
営費、交通燃料費、事務通信費、子ど  
も達の世話をするスタッフの人件費等  
に使われています。

今年15年目をむかえたミンダナオ  
子ども図書館が続いていくことが出来  
るのは、皆さま方の変わらぬお支えの  
おかげと深く感謝申し上げます。(な  
かには、100円ご寄付くださる幼稚  
園生もおられ、礼状を書きながらにっ  
こりしてしまいました。) 今後とも、  
ミンダナオ子ども図書館をどうかよろ  
しくお願いいたします。



**ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、  
母子家庭の子、親がいても学校にいけない子を採用基準とし、大学まで通えます。  
その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。  
学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。**

# この子たちの支援者になっていただけませんか！

**Sahida L. Mamocao 16歳 マギンダナオ族 バロンギス高校5年生(6年制)**

日本の皆さん、こんにちは。私はサヒダといいます。

ミンダナオ島のイスラム自治区、マギンダナオ州のパガロンガンにある、カルボガン出身です。カルボガンには、昨年、MCLの提案で、日本のODAの援助でしっかりした小学校が建ちました。その時、私はもう高校生でしたが、MCLのことを知り、奨学生に応募して、採用されることになりました。今、バロンギス高校の5年生です。

私は8人兄弟の7番目に生まれました。父と母は、トウモロコシを植えたり、川で魚を採って、私たちを育ててくれています。カルボガンは、大きな川の側にあり、魚がたくさん採れます。でも、洪水が多く、時々家が水に浸かったり、せっかく育てたトウモロコシが水没してしまうことがあります。新しい小学校は、土台を高くして建てられたので、洪水の際の避難所にもなり、とても助かっています。

また、私たちの住んでいる辺りは政情が不安定で、ときどき戦闘が起こります。2015年の2月から3月にかけても、ムスリム勢力同士の衝突があり、村の人みんなでパガロンガンの役所に避難し、1か月程テントで暮らしました。その間は学校に行けず、畑に戻ることもできませんでした。

私の父は、普段は農業をしています。イスラム自治区の司令官でもあり、心配でした。私自身は、大学を出て、IT関係の仕事に就いて、家族を助けたいです。故郷から戦闘が無くなり、平和に安心して生活できる様になることを祈っています。



**Mecca S. Manib 15歳 マノボ族 マノンゴル高校2年生(6年制)**

私の名前はミカ。今年の6月から、MCLで暮らしている高校2年生です。

出身は、MCLから車で1時間くらいのところにある、マグベットのボンゴラノン村のウォーターフォールズという集落です。名前の通り大きな滝があって、アポ山に登る登山口の一つにもなっています。

兄弟は5人で、私は上から4番目。18歳で高校3年生の姉もMCLの奨学生で、一緒にMCLに住んでいます。信仰は、キリスト教、ひいおばあちゃんは日系人で、片言の日本語もしゃべりました。私も、日系人です。

私には両親がいますが、よその人の土地に行き、トウモロコシやサトウキビの収穫をして現金収入を得ているので、生活はとても苦しいです。私たちは、自分たちの土地を持っていないので、地主さんの土地を借りて、住まわせてもらっています。毎日の食料を確保するのも大変です。

父は、少しでも収入を増やすために、バイクタクシーもしていましたが、昨年事故でけがをしてしまい、働けない時期があったので、姉がまずMCLに移り、今年から私も両親の元を離れました。家族と離れるのは寂しいですが、MCLから通学する方が、毎日学校に行けるし、ご飯の心配をしなくていいからです。

まずは、高校を卒業して、できれば大学に行って、学校の先生になりたいです。そして、家族の生活を楽にしたいです。MCLでは、他の村から来たマノボやビサヤの子、イスラム教徒の子たちとも友達になって、毎日楽しいです。一緒に踊って笑っています。日本の皆さん、もしMCLに来てくださることがあれば、私の村に行き、滝つぼで泳ぎましょうね。水は少し冷たいけど、とっても楽しいですよ。



## わたしの少女時代の 思い出から (8)

松居 エープリルリン



「外は、寒くなってきたし、もうおそ  
いから寝なさい。」おぼさんが、いった。  
「はい、おぼさん。」わたしは、答えた。  
「わたしは、先にねるよ。おやすみ！」  
「ええ、おぼさん。おやすみなさい！」  
おぼさんの後について、わたしも家  
のなかに入った。まっすぐ自分の部屋  
にいくと、寢床に入る前に、明日の学  
校の準備と教室の鍵を用意した。  
よく朝、鶏の鳴き声でめがさめた。  
家の後ろで、鶏が鳴くと、反対側にい  
る鶏が答えた。

コケッココー！  
「うーん。4時半だわ！」  
わたしは、手をのばすと、ベッドか  
ら起きあがった。  
「台所について、朝ご飯の用意をしな

くっちゃ。」それが、わたしの毎朝の  
さいしょのお仕事だった。

朝のおしごとが終わると、朝ご飯の  
食卓の準備をはじめた。家族の人たち  
は、みな起きてきて、仕事と学校にい  
くための準備をはじめた。食卓が整う  
と、わたしは、みんなを呼んだ。

おぼが、最初に台所に入ってくると、  
おじが続き、3人の子どもたちがきた。  
みんなが食卓について、食前のお祈り  
を捧げるまえに、おぼさんが、わたし  
を呼んだ。

「リン。入ってきて、いっしょに朝食  
を食べなさい。学校に、遅れないよう  
にね。今日は、学校の創立記念日で  
しょ。」

「はい。おぼさん。」わたしは、返事  
した。

どうして、今日が、学校の創立記念  
日だって、おぼさん、わかったんだろ  
う。わたしは、ちよつとビックリして  
思った。わたしですら。ほとんど忘れ  
かけていたのに。わたし、毎日、家の  
お仕事がたくさんあるから、学校の行  
事には出たことがないし。

食事をたべているあいだは、静か  
で、だれも話そうとしなかった。あえ  
て、言葉を口にしたくないのかな。わ  
たしは、いつもみんなが食べ終わって  
から、一人で台所で食べていたし、いっ

しよに食事をする事なんてなかった  
から、わたしがいると、不自然な感じ  
になるのかな？わたしが、いっしょに  
食べない方が、いいみたい。

わたしは、食べながら、そう感じた。  
「そう！おかあちゃん。なぜ、学校の  
創立記念日が、今日あるってわかっ  
たの？」長女がきいた。

「PTAの役員の方から、手紙を受け  
とったのよ。」おぼが、答えた。  
「そうだったの。」

「そうか！それで教室の鍵が、わたし  
にあずけられたのか。」わたしは、ひ  
とりつぶやいた。だから、おぼさんは、  
わたしを早く学校に、やらさなくっ  
ちやいけないと思ったんだ。それで、  
いっしょに食べなさい、っていったん  
だ。PTAの役員が言ったんだったら、  
はやく急いで学校にいかなくっちゃ。

食堂は、決して広くはなかった。6  
人で、いっばい。左側には、流し台とお  
皿をおく場所が、右側には、キャビネッ  
トが置かれ、テーブルの隅には汚れた



台所があった。

食べ終わると、お皿と料理につかつ  
たお鍋を洗った。そして、テーブルを  
きれいにふいた。いそがなくっちゃ、  
わたしが、鍵をもって行かなかつた  
ら、先生もクラスメートも教室に入れ  
ない。

わたしは、道ばたを駆けるように歩  
いていった。7時になる10分前には、  
どうしても着かなくっちゃ。先生も、  
同じころには来るだろう、7時15分  
に国旗掲揚式が始まるから。創立記念  
式典は、8時にはじまる。

息が、はげしくなり、胸が、ドキド  
キになった。首のまわりは、汗だらけ。  
その汗が、首をつたって流れこみ、体  
も汗まみれになってきた。橋のまん中  
まで来た時、とつぜん、お弁当箱を忘  
れたことに気がついた。

その日は、家にかえれないし、遊び  
に使うためのTシャツも忘れていて  
わ。でも、もう家までは、もどる時間  
がない。7時までには、学校に着かなか  
つてはならないから。

「おはようございます。先生！」わた  
しは、ごあいさつした。

「おはよう！」先生は、こたえた。

「あらまあ、どうしたの。そんなにビツ  
シヨリ、汗をかいて。ハアハア息も、  
してるのね。」先生は、心配そうにた

ミンダナオ子ども図書館についての情報、2006年からの日々の活動報告など  
詳しくはウェブサイトのホームページを参照されると、より深くわかります。

検索：「ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>  
フェイスブック：松居友 or ミンダナオ子ども図書館



ずねた。

「わたし・・・わたし・・・走って！」  
でも、言葉が続かなかった。

「わかったわ。まずは、休みなさい  
ね！」

クラスメートの一人は、笑いながら  
いった。

「あれまあ、エープリルリン！今日は、  
なんでそんなに早く来たの？」他のク  
ラスメートも、笑った。わたしは、返  
事もせずに、静かにしていた。

しばらくすると、国旗掲揚式の鐘が  
なった。わたしたちは、列に並んで直  
立し、国旗が掲揚されるのをまった。

掲揚式が終わると、すぐに開校記念  
のイベントがはじまった。

「みなさん、聞いてね！」先生が、開

会宣言のあとに、何をするのかを話し  
た。

「わかったわね。競技が始まるから、  
準備してね。」担任の先生が、いった。

「はい、先生！準備は、出来てます！」  
クラスメートたちは、声をそろえて  
いった。

みんな、準備したイベントを始める  
のに、興奮していた。わたしだけが、  
何の準備もしていなかった。

何人かは、ボールでゲームをはじめ  
た。その他のゲームは、競争ではなかつ  
た。クイズや質疑応答や知恵比べ。

わたしは、見て楽しんでいただけ。  
やっている子たちの、一人になった気  
持ちで。

「ゴー、ゴー、ゴー！」わたしは、さ  
げんだ。スコアーがとれたときも、  
「イエーハイ！」と、さげんだ。

「エープリルリン！」だれかが、わた  
しを、呼ぶ声がした。みわたしでも、  
だれが呼んだかわからなかった。

「エープリルリン！」声が、また  
きこえた。

両脇をみまわしても、たくさんの学  
生たちと先生がいるだけで、だれが呼  
んだんだらう。

とつぜん、だれかが、わたしの肩に  
触れた。

「あなたの、先生が、呼んでるよ！」

彼女は、いった。

「エッ！」彼女の顔を見て、ショック  
をうけた。

「あなたの先生、二度も、あなたを呼  
んだわよ！」彼女が、こたえた。

「わかった！先生、どこにいるのかな  
あ？」

「ほら、あそこのバレーボールのコ  
ートにいるわ。」彼女は、指をさすとい  
った。

「ほんと！ありがとう。」わたしは、  
答えると、ニッコリとほほえんだ。

彼女が、指さした方を見ると、先生  
が、こっちにいらっしやい、と手を  
ふっているのが見えた。バレーボール  
のコートは、そんなに遠くなかったけ  
れど、わたしは、小柄だったし、た  
くさんがいたので、かんたんに見つけ  
られなかったのだ。

わたしは、走って、先生の所にいく  
と、何か大事なお話があるような様子  
で、先生は、わたしを見つめた。

「エープリルリン。今日は、何のゲー  
ムをするの？」先生は、たずねた。

「わたしの参加するゲームは、ないん  
です。」そう答えると、先生がいった。

「わかったわ。そうなのね！でも、今  
わたしたち、バレーボールに参加でき  
る子をさがしているのよ。なぜなら、

あなたのクラスメートの一人が、ほか

のボールゲームと重なっていて、バ  
レーボールには、参加できなくなつて  
しまったの。かわりに、あなたが出て  
くれない。」

「あれー！わたし、ゲーム得意じゃな  
いけど。」わたしは、ちゅうちょして  
いった。

「いいのよ！試してごらんさい！ど  
う？」

「はい、わかりました。やってみます。」  
「よかった！」先生は、わたしの肩を  
たたくと、ほほえんだ。そして、参加  
者の名簿がのっている机にむかうと、  
わたしの名前を書きこんだ。

わたしは、興奮して、ときどきした。  
その時の気持ちを、どう表現したらい  
いかわからない。バレーボールが出来  
ることに、とっても興奮したけれど、  
ほんとうに出来るかしら？でも、チー  
ムのために、やれるだけのことをやら  
なくっちゃ。

そして、ゲームがはじまった。

そして、ゲームがはじまった。

そして、ゲームがはじまった。

そして、ゲームがはじまった。

そして、ゲームがはじまった。

そして、ゲームがはじまった。



# Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない  
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも  
はるかに美しいと感じるときだってある。  
けれども、どうにもならないのが、たべられないときと、  
お金が無くて学校に行けないとき、病気になるでも治せないとき・・・



## ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、**医療や読み聞かせ等の活動全般にかかる経費と子供たちの生活費を支援**・・・自由寄付  
直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった方には隔月に機関誌『ミンダナオの風』と年一回絵本をお届けします。

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。まだ支援者が見つからないにも関わらず放っておけず採用している140名ほどの奨学生達の学費。保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている200名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々に充てています。

機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。

他の方々に紹介していただければ幸いです。不要の方は、ご一報ください。

- 2、**植林環境支援**・・・6万円（ゴム、カカオの木600本、1ヘクタール、現地作業代）  
洪水対策と先住民が土地を手放さないようにするための、経済自立支援です。
- 3、**保育所建設支援**・・・90万円（簡易保育所は止め、スタンダードにしました）  
総コンクリート製をご希望の方は、130万円可能です。  
開所式の参加や訪問も可能です。毎年チェックし、必要な場合は修理をしていきます。

### スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み生活を保障（現在80名）。

支援には学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、下宿代、生活費等が入っています。

- 1、**大学生スカラシップ支援**・・・年額70000円（月額5833円）
- 2、**高校生スカラシップ支援（日本の中高生）**・・・年額60000円（月額5000円）
- 3、**里子支援（小学生）**・・・年額40000円（月額3333円）

スカラシップの場合は、振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校」「里子」と書いて振り込んでいただければ、現地スタッフの宮木梓よりお便りします。

その後、機関誌に同封して高校・大学生の場合は本人からの手紙（英語）、6月にスナップ写真、8月に成績表、12月にはカードが届きます。プレゼントや文通も可能です。日本語の手紙は、現地で翻訳して当人に渡しています。

小学生の里子の場合は、手紙はありません。プレゼントは可能ですが、文通は出来ません。

事前の紹介や希望、訪問などのご相談は、メールで現地スタッフの宮木梓（あずさ）さんか、

FAXで日本事務局の前田容子さんに！訪問の際は、ダバオ空港にお迎えに行き、

MCLに宿泊していただき自宅にもご案内します。宿泊費はとりません。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、

**メール [mclmindanao@gmail.com](mailto:mclmindanao@gmail.com) 現地日本人スタッフ：宮木梓（あずさ）**

**FAX： 0743 74 6465 日本事務局 前田容子**

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>

**ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名『ミンダナオ子ども図書館』**

（ネットバンキングも可能です）■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900

■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 ○一九店（ゼロイチキユウ店） ■口座番号 0018057

講演会、報告会、家庭集會に、松居友が講演料、謝礼に関係なくうかがいます。

サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。

メールや電話でもお申し込みください。講演を企画してくださるのも、大きな支援です。 12

メール：[mcltomo@gmail.com](mailto:mcltomo@gmail.com) 携帯：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）